

巻 頭 言

「聞こえにくいことを伝える」

宇田川 芳江

最近、難聴者の困りごとを聞く機会が増えた。相手の言ったことが分からず、2回までは聞き返すが、それ以上は相手の表情が陰しくなるか、大声で連呼されるのが予想できるから、聞けずに分かったふりをしてしまう。言われたことが分からずに、復唱を頼んでも相手の声が高く補聴器で聞き取れない。耳が聞こえにくいことを言わないといけないと分かっているが、全く聞こえないわけでもなく聞こえるときもあるので、なかなか言い出せない。聞き返すと、たいしたことでないから聞かなくていいと言われる。筆談を頼んで書いてもらった内容に声で応えると、聞こえていると思われてその後は書かずに、普通に話しかけられてしまう。などなど、どれも切実な声ばかり。

全く聞こえないのも不便、中途半端な聞こえも不便、片耳難聴や軽度難聴も不便。平均聴力レベルや、身体障害者手帳の有無や等級に関係なく、難聴は本当にやっかいな障害だ。コミュニケーションは相互作用。自分が補聴器のボリュームを最高にしても、聞き取れないものは聞き取れない。話す相手の配慮や歩み寄りがどうしても欠かせないが、聞こえにくいことを伝えるのは相手に迷惑をかけると思ってしまうと、なかなか頼めないもの。

昔、生協で働いていた。そこで働くことを勧めてくれた人は、「難聴があってもみんながちょっと気を付けてくれれば大丈夫よ」と言った。しかし、実際に働いてみれば、ちょっと気を付けてもらうことがどんなに大変かを思い知ることになった。働くことがストレスになり退職を申し出たとき、上司が言うには「みんなは、あなたが何に困っているのか知らないんだよ。言わなきゃだめだよ」と。具体的なSOSを出さなければ伝わらない、わがままでも何でもなく、みんなと一緒に働いていくためにはSOSを出して構わないのだと、このとき初めて知った。

そうはいっても自分の困りごとをストレートに伝えることは難しい。ちょっと演技交じりに「あなたが口をはっきりさせてくれるから助かるわ」「ちょっとメモしてくれたから間違えなかったわ」と感謝を表に出して言うてみようか……。ゴマすりと思われてしまうかもしれないけど。